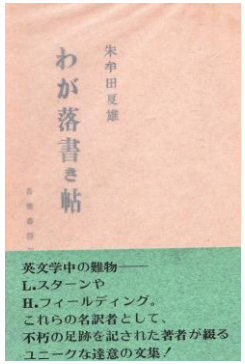
附属中学校　教官伝
英語科編７
第１０７号
平成２１年１０月３０日

１１　名著『英国の風物』

篠田　錦策　岐阜県出身　東高師３６卒
在職３６～３８　東高師教授

明治の後半になると、英語の教授法はそれなりに進んできましたが、一方で、その教育効果がなかなかあがらないことが問題となってきました。大正３年、第２回全国英語教員大会が東京で開催されたときに、「英語に対し中学生をして、なお一層の興味を感ぜしめる方法」が協議されました。大正５年ころには、外国語に賛否両論が渦巻き、作家の岩野泡鳴などは、普通教育から外国語を廃止することなども主張しました。そのようななかで、英語教師に実物・実況の知識がなくて教育の効果があげられず、また、生徒に英語の興味をもたせることも出来ないとして、それらを補うために書かれたものが『英国風物談』（スウィート著）でした。これと同じような状況が昭和にも起こりますが、その時に、名著『英国の風物』（研究社・昭和１５）を著したのが篠田錦策です。その内容は、前編で英人の生活を気候風土、食べ物などあらゆる場面のようすを描き、後編では英国の制度をこれまたあらゆる場面で描き、一種、イギリス百科事典のようなものとなっており、英語の教師には便利なものとなっています。

ところで、篠田の人となりについては、後に附属中の教官になる福原麟太郎が次のように記しています（福原麟太郎著作集五）。「先生の記憶は、人に目立つことはしない、ひたすらに教え子たちの幸福のために尽くす、ということで一貫し、温雅な紳士の一言で代表され」るが、あるときの会合で、即興に染筆を頼んだとき、「寒月天にあり　情熱胸にあり」と記したので、穏健のうちにも真の強さがある先生であると感じた、と。篠田の教え子には、後にやはり英語の大家となる東大教授・朱牟田夏雄（３３回）がいます。



篠田の『英国の風物』と朱牟田の著書

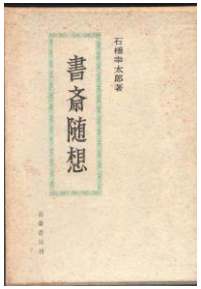
番外　雑誌『英語教授』の編集

ウィリアム・スウィート　英国

篠田の記事で、『英国風物談』を著した人物が、スウィートだと記しましたが、この人物は、どうも附属中で現在のＡＬＴの役割をした人物であったようです。以前にも記しましたが、ＡＬＴにはどのような人がいたのかは完全にわかっていません。しかし、東京高等師範学校の教師としては、明治３０年代に、ワトキン、フェノロサ、スウィフト、オーガスト・ウッドなどがいたことがわかっており、彼らが後に附属中学の教官となる人々と一緒に研究会などを開いているところを考えると、附属中でも教えていた可能性は大です。そのなかで、スウィートをあげたのは、大正年間に附属中生徒であった山根銀一（２８回・音楽家山根銀二の兄・３２回）らの授業についての思い出話が残っているからです。

そのスウィートについて記す前に、明治から大正にかけて、日本の英語教育に大きな影響を与えたもう一人の英国人スウィートについて述べておかないと混乱がおこりますので、それを先に述べて起きます。その人物は、映画「マイ・フェア・レディ」のヒギンズ先生のモデルとなった音声学者のヘンリー・スウィートです。彼は、オックスフォード大の万年助教授でしたが、日本からの留学生であった神保格（１０回・後に附属中教官にもなる）らが、言語学などを習い、日本の英語教育に少なからず影響を与えています（伊村元道著『パーマーと日本の英語教育』大修館・１９９７）。

ところで、一方のウィリアム・ラキソン・スウィートですが、ロンドン留学中の夏目漱石の紹介で、明治３４年、熊本の第五高等学校の教師として来日しました。その後、３９年に上京し、東京高等師範では、大正１０年まで教えました。そして、その上京した年の３９年には、創刊された雑誌『英語教授』の編集にあたったり、文部省の講習会が東高師で開かれたときに、彼は、Ｑｕｅｓｔｉｏｎ Ｂｏｘという箱を置いて質問させ、翌日それに答えることなどを行ないました。このＱｕｅｓｔｉｏｎ Ｂｏｘは、現在の『英語教育』誌のフィーチャーの欄の起源となっているものです。このような活動を続けていたスウィートについて、山根銀一は、第１次世界大戦の休戦になった日の附属中学の授業で「感激に胸をふるわせて３０分程何か言い、そのあと平然としてまた授業を続けていった」と思い出を語っています（『ある英文教室の一００年』伊村論文）。一方、後年、附属中学の教官となる石橋幸太郎は、高等師範での授業の印象を次のように記しています。

「スウィート先生のことを、ちょっと話しておこう。先生は典型的なイギリス紳士で、寸分のすきもない身だしなみ、教卓につかれるときもズボンに皺のよらないように、脚を棒のように真直ぐに伸ばして掛けられる。その几帳面な先生がディクテイションを受け持たれた。・・二度同じことばを間違えると、ちゃんと覚えていて、注意されるというふうで、その厳格さには、尊敬を通り越して、畏怖の念を抱いたものである。」

スウィートは、大正１０年、東高師を辞めて、しばらくして英国に帰り、ロイター通信社で日本関係のニュースの処理などにあたりました。石橋幸太郎著『書斎随想』吾妻書昭和４３